

# 久々知妙見宮 妙見堂 落成慶讃法要

平成11年6月20日奉行



久々知山 廣濟寺

謝辞 広濟寺住職 石伏 龍齊

当山妙見堂は延享元年(1744)に建立されてより、250有余年過ぎましたが、平成7年の阪神淡路大震災により全壊致しました。10年前に本堂庫裡を再建したばかりでしたので、地震の教訓を残しつつ、あと10年ほどはそのままにせざるを得ないのではと考えていました。しかし、檀信徒より建て直しを求める声が相次ぎ、平成大不況の渦中と知りつつも新しい妙見堂が建立されることになりました。

建立費は檀信徒や各界より浄財喜捨を受け、お陰様で近松門左衛門ゆかりの古刹に相応しい木造建築の妙見堂が完成しました。本日茲にめでたく落成慶讃法要を相勤めることが出来ますのも、仏祖三宝守護の善神の御加護もさることながら、有縁各位の絶大なる御支援の賜と法悦歡喜致しており、衷心より深々の謝意を申し上げる次第でございます。

この上は浄業達成に賜りました資助の方々に対し、挺身もって御報謝申し上げるべく、外護丹誠各位の家運栄昌と除災得幸を終生御祈念申し上げますことをお誓い致しまして謝辞と致します。

謝辞 広濟寺筆頭総代 萩本 進

阪神淡路大震災により妙見堂・西門の建立、山門の解体修理を余儀なくされましたが、幸いにして地元有志各位、檀信徒皆様の温かい御理解と御協力を仰ぎ、尊い浄財を頂きました。また、行政当局からは震災以来親身なる助言と援助を頂きました。さらに、梅田工務店には今般も素晴らしい仕事をして頂きました。関係各位の献身的な御助力のお陰を持ちまして、世界の文豪近松ゆかりの寺として恥じない優れた建立完成を見るに至りました。衷心より感謝申し上げます。

いろいろ便利な時代になりましたが、反面として人類が今まで体験したことのないような大きな問題や不安が私たちの目の前に立ちだかっています。しかし、この妙見堂の完成により妙見様の守護の靈験は益々顕著になり、来るべき二十一世紀には私たちの守護神として、一層尊い存在になると確信致します。

最後に、広濟寺の益々の発展と、皆様方の御多幸を祈念しましてお礼の辞と致します。



ただみつなか  
多田満仲銅像（JR川西駅）



やぶみいし  
矢文石（須佐男神社）

## 広濟寺の妙見宮について

戦後の高度成長期より以前、広濟寺のある「久々知」は大阪近郊ではあっても農村の様相であった。このようなところに、どうして既に売れっ子作家であった近松門左衛門が、わざわざ久々知の広濟寺まで来られて檀家となったのだろうか。そんな疑問を持たれたことはないだろうか。

広濟寺といえば近松門左衛門のお寺として認識されているが、その近松門左衛門は広濟寺をどんなお寺と認識していたのであろう。

平安時代中期に多田満仲（源満仲 912 - 997）という武将が開基したと伝わる妙見宮、それが久々知妙見宮なのである。なんでも、天徳元年（957）に多田満仲が矢文を放ったら、それが矢文石に当たり、その地に北辰星（妙見宮）をまつられたと伝わる。多田満仲は清和天皇

の孫にあたり、清和源氏の基礎を作った。子孫には鎌倉幕府を開いた源頼朝など、有名な武将が名を連ねる。

## 近松門左衛門との縁

その由緒ある妙見宮とともにあった広濟寺は元々禅宗の古刹であった。しかし、南北朝時代の元弘3年（1333）赤松圓心と六波羅勢が久々知で対陣し、兵戦の被害を受けてからは、荒れるがままに放置されていたと伝わる。現在、禅宗時代の広濟寺の記録は無いに等しいので余程の荒れようだったのだろう。

江戸時代になって正徳4年（1714）2月25日、日蓮宗僧侶の如意珠院日昌上人はたまたま久々知妙見尊の示現をこうむり、広濟寺を再興される誓願を立てられた。かくして、開山日昌上人は由緒有る多田満仲勧請の妙見宮をまつる妙見堂そして本堂や庫裡などを建立された。

開山日昌上人の父である尼崎屋吉右衛門と近松門左衛門が知人であったことが、広濟寺と近松門左衛門の縁の始まり



久々知村妙見町道標  
 (次屋二 交差点)  
 安永八年(1779)のもの



昔の広濟寺と妙見宮  
 近松記念館にて展示中

せつめいしよづえ  
**摂津名所図絵 (下図)**  
 江戸時代の広濟寺は奥に妙見祠があり、その右側に鬼子母神堂、左側に稲荷堂があった。参道左側に矢文石と絵馬所。参道右側に広濟寺の本堂・庫裡があった。



『摂津名所図絵』の久々知妙見祠の頁



旧本堂と妙見堂への渡り廊下



広濟寺開山 にょいじゆいんにつしやうしやうにん 如意珠院日昌上人像



妙見みくじ札と版木

開山の日昌上人が漢文、近松門左衛門が和文を担当。当時既に世に知れた近松が「おみくじ」を作ったことから、開基檀越だんのつの一人としての並々ならぬ久々知妙見宮への思い入れと献身の姿勢が推し量られる。近松記念館にて展示中。

だと伝わる。しかし、それだけではなく由緒ある妙見宮をまつる寺であることが重要な意味を持っていたのであろう。

## 江戸時代の繁栄

再興開山してより、広濟寺は庶民の信仰にぎをあつめて賑わったようである。『撰津名所図絵』には「近年妙見尊を信ずる事多く、特に久々知の妙見、能勢の妙見とて、詣人多く靈驗日々に新し、これを時行神はやりという」とある。有馬街道に面していたということもあり、大阪方面からの参詣も絶えなかったようで、能勢の妙見とともに賑わっていたようである。

繁栄の名残として灯籠群がある。一部は震災で倒壊撤去されたものの、堂島や中之島など大阪の講中こうちゆうが建立した灯籠が広濟寺境内けいだいや須佐男神社境内すさお けいだいにある。

## 明治の神仏分離令

さて、多田満仲みつなかと近松門左衛門ゆいしよの由緒ある妙見宮の繁栄にも影の時代がやってくる。それは明治維新の仏教排斥運動はいぶつつきやくたる廃仏毀釈である。明治元年の「神仏分離令」によって、中国大陸からの外来神である妙見はまつることを禁じられた。全国的に妙見社は神道の祭神に改められ、久々知の妙見宮も例外ではなかった。かくして、久々知の氏神の地位を失い、立派な旧妙見宮にあった北辰妙見大菩薩、牛頭天王、諏訪大明神にっしやうしやうにんの御神体は広濟寺の開山日昌上人をまつる「開山堂」に移され、日昌上人尊像とともに安置され、現在に至った。

<sup>じらい</sup>  
爾来、寺の勢いも、妙見宮の信徒も徐々に減衰の一途をたどり、最近まで執り行われていた、1月16日、8月16日の縁日も夜店が無くなり閑散とするありさまである。

## あらたかな靈験

しかし、その靈験はいっこうに衰えてはいない。忘れもしない、平成7年1月17日の阪神淡路大震災であるが、この日は久々知妙見宮縁日の翌日である。前日の夜7時から2時間、縁日の法要が勤められていたのであるが、法要終了後わずか9時間後の大震災である。

幸い久々知にも広済寺檀信徒の千余軒に震災犠牲者は出なかった。神戸・西宮・芦屋・宝塚の激震地にも200軒ほど檀信徒が居たのだが、同居の家族を含め横死者は一人も居ない。これは涙が出るほど有り難いことである。

地震が起こった時間帯も恐らく一番被害の出にくい時間だったのは不幸中の幸いといしか言いようがない。

天の中心である紫微垣の中心に居する天帝として、妙見宮による万民守護の靈験が如何に顕著であるか、そして法華經の経力の素晴らしさを再認識したものである。

<sup>みつなか</sup>  
多田満仲の平安時代より千余年の永きにわたり久々知にあり、300年近く法華經の法味にひたって来られた靈験あらたな妙見宮、それが久々知妙見宮である。

(文・写真・レイアウト 副住職 石伏 叡齋)



阪神大震災前の鳥居



阪神大震災直後の鳥居  
妙見堂も大きく傾き危険な状態だった

## ほくしんみょうけんたいぼさつ 北辰妙見大菩薩とは

妙見のことを語るほど難しいことはない。まず呼称からして多様である。北辰妙見菩薩という聞き慣れた名前の他に、太一北辰尊星、天御中主尊、真武太一上帝靈応天尊、太一上帝、太極元神とある。名称の多様さは、妙見信仰の展開と伝播の複雑さを物語るものである。それ故、妙見の誓願や靈験となればこれも沢山ある。列挙すれば以下の如くである。

擁護国土、天下太平、万民守護、宝祚長遠

文武官将官位昇進、知行加増

立身出世、財宝充満、諸運長久、家業繁盛、子孫安泰

一切の災難退散(火難水難等)

運弱く貧窮病身のもの、衣食貧しきもの、妙見信心により金銀米銭自然に充満、富貴身となる。

智慧福德の男子、端正艶美の女子を出生、安産守護

一切の難病、悪病平癒

土農工商は諸道諸芸に妙達

山中海上の一切難を退く

諸願成就、五穀豊穰

(吉岡義豊著作集 第二巻 P61)

この妙見であるが北極星あるいは北斗七星を合わせて神格化されたものである。天体の動きなどその原理を知らない中世以前の人々は、台風や地震そして飢饉など天変地異の起こる原理も知る由はない。これら自然現象に畏怖の念を持ち、人の運命や災難を左右する神として不思議な力を天体に感じていたのである。例えば星座や二十八宿などの占星術などは現在にも根強く残っている。

そのような天体の中でも、北極星は日周運動にも唯一不動の星として古代人に注目されていた。のみならず、海上や砂漠を大移動する民にとって北極星は欠くことのできない羅針盤であり、守り神として尊崇された。やがて、古代中国では天の中樞、天を支配する天帝として尊敬されるようになった。そして、中国の道教では妙見は最も重んぜられた本尊となる。

その妙見信仰が日本に伝わったのは意外と古く、『日本靈異記』には称徳天皇の時代(764 - 769)に妙見菩薩に灯明を献じた寺があったという記述あり、妙見信仰は奈良時代末期には庶民の間にかなり広まっていた。ただ、妙見信仰の発展と伝播の過程でいろいろな信仰と習合して来たため、妙見の名称や靈験だけでなく御神体の形もいろいろである。これらを説明し理解することはきわめて専門的になり、道教や密教に造詣が深くなくては到底理解し得ない。ただ、靈験ある神祇として中国や日本で篤く信仰され続けたということは疑いのない事実である。

